



陥没乳首でお悩みの鬼教官を  
騎士団専用「娼婦」にしてみた。

陥没乳首でお悩みの鬼教官を  
騎士団専用『娼婦』にしてみた。

- 1 陥没乳首と処女喪失
- 2 オーク型バイブを装着して講義
- 3 仮眠室で少年たちに……
- 4 慰安訓練は公開オナニーと乗馬訓練
- 5 訓練場で巨根とキスハメ
- 6 おじさんの長竿で中出し完堕ち

# 1 陥没乳首と処女喪失

鬼教官。

それが俺の上司の通称だ。

本当はちゃんとした名前がある。

ライザリアエルガードナー。三十二歳。

先代の騎士団長が娼館で腹上死した事により、弱小騎士団のたるんだ規律を正すため、王都から派遣されてきた女団長だ。風紀紊乱ふうきざらんは敵とばかりに彼女が赴任して以来、訓練に次ぐ訓練が課され、娼館に行く回数も厳しく制限されることとなった。

しかも彼女は俺たち団員を見れば訓練中にクソ虫と言いつつくせに、自分のその豊満なボディは見せつけてくる。白い隊服でも隠しきれないほどのたわわに実った胸、くびれた腰に張りのある尻、むちむちとした感触の太もも。そのどれもが、若い団員の雄を刺激する。

そのくせ整った目鼻立ちをして、きつく睨み付けてくるものだから、新たな世界の扉をひらきそうになる奴まで出ていた。

これで、どうして訓練ができる？

限界だ。

せめて娼館に行ける回数を三ヶ月に一回から月一回に上げて欲しい。それが無理ならやらせろ。若い、飢えた男たちの性欲を甘く見ないでほしい。

寝込みを襲う計画もたてたが、あえなく失敗した。

当時、寝込みを襲われた鬼教官殿は嬉しそうに言ったものだ。

『これも日頃の訓練の賜物だな。相手の油断を利用するという発想は良いぞ。クソ虫ども。このまま励め』

なんて言われる始末。

屈辱だ。

そもそも彼女は王都から遣わされた指折りの騎士だ。剣の腕前はもちろん、魔法の扱いも一流だった。

俺たちが束たばになって襲いかかろうとも、かないっこない。なにせ王国騎士団のなかでも最弱と言われる連中なのだから。

こうなってくると、団員たちのあいだにもあきらめムードが漂いはじめる。

『鬼教官になじられながら訓練に励むのも悪くない……』

『あのキツい目で見下ろされるのも結構イイかも』

なんて言うバカまで現れた。

いつから俺たちはマゾヒストの集まりになったんだ。

そんなことを久しぶりに訪れた娼館で、やり手ばばあに愚痴ぐちると、思わぬ言葉をかけられた。

「なんだい。そんな理由でうちに来る客が減ってたのかい。そういう女はね。男に抱かれた経験がないのさ。女として扱われる喜びを知らないから、男にキツく当たる。どうせ、その鬼教官とやら未婚だろう？」

店のカウンターで娼婦が降りてくるのを待つ間、やり手ばばあの言葉をゆっくりと反芻はんすうする。

そういうえば夫がいるなんて噂は聞いたこともない。薬指には指輪をはめた跡も見られない。

間違いない。

独身だ。

この間、貴族の娘に婿入りすることが決まった若い騎士には、ものすごくキツく当たっていた。その前は、ようやく恋人ができた嬉しがつっていた部下がキツく睨にらまれたと聞く。

もしかしなくても、これが彼女の急所か。

やり手ばあがカウンター越しにニヤリとほくそ笑む。

だてに歳を重ねてはいない。

「やっぱりね。これはあたしの勘だが、その娘、まちがいなく処女だよ。男を知らないから、クソ虫だなんて言うのさ」

「しかしだな。ばば殿。あの女、王都からやってきた指折りの騎士なんだぜ。俺たちが寝込みを襲っても、返り討ちに遭わされたんだ。そんな女をどうやって抱けって言うの

「や」

「かーっ！　そこが男の甲斐性かいしょうの見せどころってもんだろ。力でねじ伏せられないなら、口を使いな。口を。男慣れしてない女を落とすなら、言葉で落とすんだよ。可愛いって言われれば大抵の女は相手を意識し始めるものさ」

「あの鬼教官に？」

きつくまなじり 眦まなじりをつり上げた顔しか知らない。

「あんな女に可愛いと言うのはなかなかつからいものがある。

しかしやり手ばあは、舌鋒ぜっぽうをゆるめてくれなかった。

「あんた……このまま娼館に来る回数が減らされ続けるのと、前みたいに人目気にせずに来れるのと、どっちがいいんだい？」

「そんなの決まってるだろ！」

「なら決まりだね。その鬼教官とやらに男を教えてやりな」

やり手ばああの言葉には有無うむを言わさぬ強さがあった。

その後、お気に入りへの娼婦との時間を存分に楽しみ、娼館をあとにしたが、やり手ばああの言葉は俺の頭に住み着いた。

確かに腕っ節では鬼教官に勝てない。

魔法を使えばすぐに勘づかれるだろう。となると言葉で彼女を落とすしかない。

キーワードは『結婚』と『カワイイ』。

娼館で女の子たちと酒を飲んでる時みたく、気軽に言ってみればいいか。

うんうんと悩んでいる間に、いつもの朝がやってきた。

\*\*\*

俺の仕事は鬼教官の副官だ。

初めはもつと地位の高い貴族の次男坊が担当していたのだが、彼女の激烈な指導ぶりに怖れをなして退団した。おそその後も別のやつが持ちまわりで担当していたが、俺が担当の

日に運悪く彼女がこう、申し渡したのだ。

『副官がころころ変わると、私も顔や名前を覚えにくい。今後は貴様が担当しろ』  
以来、彼女の副官は俺の担当となっている。

固定任務の拝命当時、同僚と涙の杯さかずきを交わしたものだ。

だが今回はそれがちよūdい機会となった。

「いっちょよ、やってみるか」

言うだけならタダだ。

それにダメで元々だ。

最悪、失敗したら退団でもなんでも、あとから考えればいい。

腹をくくって、彼女の執務室をノックした。

「入れ」

扉をあけると、部屋ではもう鬼教官が机にたまった書類を片付けていた。

こちらを見向きもしない。

ツンと澄ました横顔は書類に向けられている。

くせっ毛の黒髪を結いあげる時間がなかったのだろう。いつもはポニーテールにしてま

とめている髪をおろしている。肩にしなだれかかった髪がやけに色っぽい。

白地に贅沢な金の縁取りがあしらわれた隊服に似合っている。裾にはしわ一つない。きちんとした身なりは凛とした横顔と相まって威圧的だ。

女性的な柔らかさは全くない。

「今日の訓練は午後から入る。貴様も準備をおこたるな」

ドスの効いた声は、これが入りたての新米少年騎士なら、ちびりたくなるレベルだ。

「返事はどうした？」

ようやくと彼女が書類から顔を上げる。そのひと睨みを受け流しながら、試してみることにした。

「はっ。失礼しました。その、団長は今日、髪をおろしていらっしやるんですね」

「それがどうした？」

負けるな。負けるな。俺。

ここで引いたら、娼館への道が遠ざかる。

ぐっところえて、生唾を飲み込んだ。

「その、可愛いなあと思ひまして」

さすがに彼女の顔をまっすぐ見ながら言う勇氣はなかった。

部屋の窓から見える木の枝でも数えて反応を待とう。すると、ひゅつと息を呑む音が聞こえた。

「な……な……っ」

鬼教官の顔はまっかに染まっていた。

白い肌は林檎りんじのように熟れて、耳まで赤らんでいる。どんな言葉にも屈しなかった金色の瞳はいまや俺のたつたひと言に揺らめいている。眉間みけんに皺しわを寄せてばかりだった眉は、へニヤへニヤにゆるみ、可憐かれんな唇からは言葉にならない声が漏れていた。

（おっと。これは……思ったよりも——？）

確認のため、もう一度同じ言葉を言った。

「可愛いですね」

びくんっ、と彼女の肩が大きく揺れた。金色の瞳は慣れない言葉にさらされて、うるん

でいる。あの鬼教官ぶりはどこへ消えたかと思うほどの変貌へんぼうぶりだった。

「き、貴様……正気か……っ」

必死に照れた顔を隠すように、こちらを睨んでくるが赤らんだ頬のせいで全く怖くない。無意識に俺の足が彼女の座る椅子へ近づいていた。

彼女の肩に手をおくと、思ったよりも小柄な体型だと気づいた。キツイ物言いをしている彼女とて一人の女だと分かる。

そう考えると、もう鼻息が荒くなつていくのを止められなかった。

「髪おろしてると、女っぼくて可愛いですよ。いや、本当に」  
顔を近づけてささやく。

彼女への褒め言葉がつらつらと口をついて出てくる。

彼女とて一人前の騎士だ。反撃しようと思えば、すぐできる。

王国でも屈指の腕前を持つ騎士なのだから。

腰に差したナイフ一つで、あつという間に形勢は逆転される。

あるいは、その唇で呪文をひと言唱えれば、俺の体は壁に激突させられて、おしまいだ。

当分のあいだ静養を余儀なくされる。

簡単に終わらせられる。

だが彼女はそのどれもしなかった。

だから俺はどんだん顔を近づけられた。照れて潤うるんだ瞳が迫る。

気づくと彼女の唇を奪っていた。

「——んんっ……やあ……ッ！」

今まで何度も聞いた迫力ある低音ではなく、女っぽさの残る高い声に背筋がゾクゾクした。

あの鬼教官が甘い声を上げている。

その事実にも、昨晚あれだけ娼館の女の子相手に吐き出したムスコは、あつという間に元気になった。ズボンの奥で、はちきれんばかりにふくらもうとしている。

逃げる舌を追いかけてきつく吸い上げる。

そっと彼女の後頭部に手を添えて、退路を断つ。

唾液だえきを流し込むと、声にならない悲鳴を上げた。なだめすかすようにほほをなでると、

赤ちゃんみたいに手のひらに甘えてくる。

カワイイ。

肉厚な舌で彼女の口内をしゃぶり、形の良い上唇を甘噛みした。

互いの息づかいだけが朝の執務室に響きわたる。ようやく唇を離れた頃には、彼女の口の端から唾液が垂れていた。糸を引いて顎をつたい落ち、純白の隊服の胸元を濡らす。無意識に導かれるまま、第一ボタンまできつく留められた彼女の上着に手をかけた。

「や……待て……、やめろ……」

なんとか団長としての威厳を取り戻そうと命令口調で俺の手を止めようとしてきたが、無視した。

とめたいなら、本気でやればいい。

興奮を抑えきれぬまま、上着のボタンを一つ一つ外していき、中に着込んでいたシャツもゆるめると、白磁のように美しい胸元が視界に飛び込んできた。

日にさらされたことがない。

一度も男に揉まれたことなどない胸には黒いコルセットがつけられていた。

男を知らないくせに、下着だけは扇情的な色合いのものを身につけているギャップに、たまらないものを感じる。

「キツそうだから、外してあげますね」

興奮した面持ちで、コルセットの紐を抜くと、胸が大きく揺れた。

たふん。

聞こえるはずのない音が聞こえて、今や俺の興奮は最高潮に達していた。

その乳首に手を伸ばそうとした瞬間、あることに気づいた。

薄ピンク色の乳輪の真ん中に乳首が沈んでいるのだ。

出てこれそうで、出られない。

わずかに乳首の先つちよが乳房の間から見え隠れしていた。

「――かんぼつちくび陥没乳首……？」

娼館あししげに足繁く通い、いろんな女を抱いてきたが、こういう胸にお目にかかったことは一度しかない。かなり貴重なおっぱいだ。

乳輪と一緒に乳房のなかにうもれた乳首は気恥ずかしそうに姿を隠している。

つん、と指でつつくと、ふしぎな弾力が返ってきた。

「さ、さわるんじゃない……っ！」

叱り飛ばす声はうろたえまじりだった。普段の迫力ある姿はどこへ行ったのかというほどの狼狽ろうばいぶりだ。

「もしかして団長……陥没乳首なの、気にしています……？」

殺意みなぎる目で睨まれた。

どうやら彼女のコンプレックスだったらしい。

それなら――、

「可愛いじゃないですか。陥没乳首。俺、好きですよ？」

そつと乳房を下から持ち上げて、音を立てて隠れている乳首にキスを贈った。

「ば、ばかなことを言うな……っ。どうせ、貴様もあとで笑いのにするのだろう」

唇を震わせて、泣き濡れる姿はとても可愛らしく、この数ヶ月のストレスも吹き飛ばすほどだった。

いつも強気な女が見せる弱気な姿に、俺の心のムスコは正直に反応した。

数時間前まで全然乗り気じゃなかったが、こんな姿を見せられたら抱かないヤツこそ男がすたる。

「お、男というものは、もつと普通の……お、おっぱいが好きなのだろう？　こんな変な胸の女をもらおうとする男など……いるわけがない」

唇をすぼめて、そっぽを向いてしまう。必死にこぼすまいとしていた涙がぼたぼたと光って落ちるのが見えた。

ああ、こいつはアレだ。

今まで必死にこの弱みを見せまいと奮闘してきた結果、今の彼女ができあがったんだ。こうなったら、はつきりとした証拠を見せてやるのが一番速い。

「あのですね。大変申し上げにくいんですが、今のあなたの陥没乳首見たら、どんな男も最高って言うと思いますよ？」

「嘘をつくな。同情なぞいらん……！」

完全にへそを曲げてしまった彼女の手首をつかんだ。

「おい、なにを……?」

そのまま彼女の細い手を俺の股間に導いた。今やズボンのなかでパンパンにふくらんだムスコをさわらせる。隆起りゅうきした竿を彼女の細い指にくつつけた。

「っ!!」

「ほら、分かります? あんたのおっぱい見て、こんなに反応してるんですよ?」

そつと挿んだ手のひらを股間にそわせた。初めて男の股間なぞさわったのだろう。彼女の指先はガタガタと震えていた。生娘きむすめのような反応に、さらに下腹部に熱が集まる。

「ひっ……!」

「陥没乳首が気になるなら、俺が出してあげますよ。ね?」

「そんなの……できるわけが……」

「やってみなくちゃわかんないでしょ」

手のひらに収まりきらないほどの巨乳を持ち上げて、乳輪に口をつける。肉厚な舌に唾液をたっぷりと含ませて、乳首をねぶった。

「んっ……」

唾液の冷たさに彼女が身をよじる。そのまま陥没した箇所をほじくり返すように舌でしゃぶり、なめた。

ちらりと彼女の表情を横目でうかがうと、彼女は必死に口を引き結び、目をつむって羞恥に耐えていた。紅潮した頬が淡い化粧のように彼女の顔を彩る。

手のひらで巨乳をもみしだくと気持ちイイのか、小刻みに肩を震わせる。

可愛らしい反応についつい虐めたくなる。

「団長って男に抱かれた経験ありますか？」

分かっているも確認しておきたかった。

「それとこれに、なんの関係が……あ……あ……ッ」

「いやあ、処女ならもつと可愛いなあと思ひまして。むちゅ」

「ふざける……なっ……きさま！」

俺の言葉に彼女の身体が反応しているのが分かる。豊満だった胸の張りが増し、口のかなでねぶっていた乳首がピクピクと痙攣けいれんします。形が変わるほど巨乳を揉みしだき、唾液と一緒に乳房を激しく舐め上げた。

「ひ……ッ……んんっ。それ、やめろ……ッ」

「こうしないと、んむ、出せませんよ。乳首」

レロレロと下から上に向かって優しく舐めたあと、前歯で甘噛みした。

「ひんっ！」

「可愛い声出せるじゃないですか」

「だま……れ……！」

侮辱されたと思ったのか殺意のままだった視線を送られる。だがそれも口全体で乳輪ごと強く吸い上げると、嬌声に切り替わった。

「ずぞぞぞぞぞ」

下品な音に彼女の腰がビクンビクンと揺れて、わななく。バキュームのように強い吸い上げを五分きっかり。

ようやく彼女の左乳首が顔を出してくれた。

「お。ちゃんと出せたじゃないですか。ほらごたいめ〜ん」

ぶつくりと綺麗に立ち上がった乳頭は、乳輪よりも色が薄く、ほんのりと桃色に染め上

げられていた。俺の唾液でべつとりと濡れた姿が扇情的だった。ツンと上向いた乳首は他の女たちと比べてもかなり長い。指でこねると、ビクビクと逃げまわる。

それが重量たつぷりの巨乳から顔を出しているのだ。

今まで誰にも触れられたことのない乳首を親指と人さし指でつまんで、クルクルと動かしした。

「いや……それ……やめろお……お！」

「お、お。すっごい敏感じゃないですか。じゃあ、もう片方も出してあげますね」

片方の乳首が姿を見せたことでより敏感になったのか。彼女の陥没乳首は今にも顔を出したそうにしていた。指の腹でこねあげては、舌でしゃぶり、ほじくり返しては、下品に吸い上げる。乳輪から垂れた唾液が彼女の太ももにぼたぼたと落ちて、真っ白な隊服に色の濃い染みを作る。

ちゅばちゅぱと赤子が乳をねだるように音を立てては、うもれた乳首を吸い上げる強さを変えていく。

軽い吸い付きに彼女の息づかいが慣れた頃合いを狙って、激しくしゃぶる。

そうすると耳に心地良い悲鳴を上げてくれるのだ。

これがあの、男をクソ虫と吐き捨てていた鬼教官の声と思うと、背筋がゾクゾクした。もっと可愛い声を上げさせて、自分が女なのだと自覚させてやりたい。

男に蹂躪じゅうりゅんされるにたる身体を持っているのだと――。

一際激しく吸いつきながら、左乳首を指でクリクリとこねまわした。

「や……それ、だめえ……ッ……!!」

ちゅほん、と音を立てて彼女の陥没乳首が姿を現した。

「ほうら。ちゃんと出せたじゃないですか」

たふたと彼女の乳房を持ち上げて、ぷっくりと立ち上がった乳首を両方、見せてやった。

「う、うむ……」

息が上がったままの彼女を置き去りにして、俺は両方の乳首を中央の谷間に引き寄せた。薄ピンクの愛らしい乳首が二つ、互いをつつつきあう。

それを前に大きく口を開けた。

「ま、待て……。いま、舐められたら——！」

その乳頭をひとくちにしゃぶった。

「や。……っ！ 本当に、待てと言つて！ 〜〜〜っツ！！！！」

声にならない悲鳴が執務室中に響きわたる。細腰が揺れて、必死に体内を暴れ狂う快楽を逃がそうと彼女がもがく。

その有り様をじっくりと目で堪能しながら、口で彼女の乳頭を味わった。前歯で甘噛みすれば、乳房がふくらむ。さらに乳頭にある穴を舌でほせてやった。

「ひっ……。だめ……。だ。やめ……。ろ……。オ」

やめろやめろと口では言うわりに、彼女の身体は俺の指にもっとさわってほしそうにしていた。

親指と人さし指の腹で乳首をクリクリと転がすと、悶絶の悲鳴を上げる。

「イってイイんですよ？ 団長」

「イク……。とは……。なんだ……。っ？」

思わぬ言葉に目を剥いた。

(もしやオナニーをしたことがない?)

時おり、訓練にいそしむことで精力発散する男は見たことがある。だがそれは女でもやれるのだろうか?

——性知識ゼロの女上司。

あれだけ毎日俺たちをクソ虫だなんだと罵倒し続けてきた女が、オナニーも知らない。その事実には俺の竿から我慢汁がたれ始めた。

鼻息荒く彼女の敏感になった乳首をざりざりと舌でなぞり、大きく深呼吸を一つ。その乳首を激しく吸った。

じゅるるるるっ。

「やだ……なにか、来る……!! 来ちゃ……う。ひいん。だめえええエエツ!!」

下品な音に聴覚も犯されて、彼女の顔が羞恥にゆがんだ。

激しく上半身を痙攣させて、艶やかな陥落の声を上げる。

息もたえだえに椅子の背もたれに身体を預けた姿はしどけない芳香をまもっていた。

豊かな雌の香りに、俺の鼻もひくつく。

「……っ。今のがイクって奴ですよ。意味、分かりました？」

ゆっくりと彼女の乳首から口を離すと唾液の糸がたれて、淫靡いんぴなつり橋を作りあげる。

惚けた息を放つ彼女にもはや鬼教官だった頃の面影おもかげはなかった。

ただ、すなおに頷く。

「電流が走ったみたいで……その、凄かった……。おまえの……技なのか？」

まだ快楽の波が残っているのだろう。びくびくと肩を震わせて尋ねてくる様子が愛らしい。

「まあ、それもありますけど……団長の身体が敏感つてのもあるんでしょ」

「私の身体が……敏感？」

戸惑った様子で、胸だけをあらわにした自分の身体を見下ろす。そっと口許に手を添えて喘ぎ声を隠す指先は、育ちの良さを表していた。

(そういや、王都でも指折りの名家の出……だったか)

遠征で上げた武勲ぶくんは数知れず。魔物討伐まっせんでも率先して先頭に立ち、立ちほだかる魔物たちを倒してきたという。

その武勲がふくれあがった影響により、彼女の婚期はどんどん遅れ、今に至るといふわけだ。

「その……お前のお陰で、少し、男というものが分かった気がする。ありがとう」  
か細い声で感謝の言葉をのべると、彼女はいそいそと隊服の襟元を引き寄せて、元の身だしなみに戻ろうとする。

（あれ？ もしかして、これでおしまいだと思ってるっしょる？）  
冗談じゃない。

俺のズボンは、彼女の痴態ちたいを見せつけられて今や、フル勃起状態ぼっきなのだ。こんな状態でお預けを食らうのなら、あの地獄の訓練に耐える方がまだ増した。

彼女の両肩を掴んで引き寄せた。

「っ？」

彼女はぼかんとした顔を浮かべていた。

こっちの溜まりに溜まった性欲など知りもしない面がにくたらしい。

「イクのを教えた礼に、俺の方も面倒みてくれませんか。めでたく陥没乳首も顔を見

せてくれた団長のデカパイで」

「は、はあ？！ バカを言うな。なぜ、貴様の面倒を私が見なければならんのだ！」

「へえー。ほおー。そういうことをおっしゃる？」

そこで堪忍袋かんにんぶくろの緒が切れた。

「じゃあ、他の奴らに団長のおっぱい、実は陥没乳首なんだってバラしてやりましょうか？」

「っ？！」

驚愕に染まった顔はすぐさま屈辱にまみれた様子で、俺をにらみつけてきた。

——が、今となってはもう怖くもなんともない。

「あいつらもビククリするでしょうよ。いつもは自分たちのことをクソ虫だと罵倒してくる鬼上司が、実は立派なおっぱいが陥没乳首だったなんて聞いたら……今までの威厳も形なしでしょうね」

「貴様……っ。私を脅しているつもりか？」

「さあ？ 団長次第ですよ。どうします？ 俺の面倒を今この場で見るか。それとも他

の団員に陥没乳首だと知られるか。ああ。それとも今まで一度も男に抱かれたことがない処女だってバラされるのとどっちがいいですか。選んでくださいよ」

「なっ。私がいっつ処女だと分かつ——?!」

失言だった。

すぐに口をおおったが、一度飛び出した言葉はもう取り返せない。

くいつと彼女の顎を持ち上げて、惑乱した瞳を正面から受け止める。

数秒、彼女は歯を食いしばり、考えに考えた。

どれが一番まともな選択か？

俺にとつては、どれでも結果は同じだ。

くやしげに歯噛みし、柳眉を逆立てる様子をじっくりと味わった。

ふとズボンのポケットに映像を録画できる水晶玉が入ればなしだったことに気がついた。

昨日抱いた娼婦を撮ろうと思って忘れていた。

そつとポケットから取りだして、彼女の視界に入らぬ位置にセットした。

準備は万端。

彼女が待ちわびた答えをつむぐ。

「分かった。貴様の面倒を見てやる」

憎悪にふくらんだ瞳で睨まれるとゾクゾクした。

こういう女を屈服させられる楽しさに知らずほくそ笑んだ。

\*\*\*

「っ……こんな、モノの面倒など見れるか……!!」

ズボンから取り出した竿を見せつけると、彼女は初めて見る男の竿から目をそらした。まるでおぞましいものでも見たような目だ。

「ひどいなあ。気に入ってくれると思ったのに」

彼女のあんまりな反応に、むくむくと反抗心がわき起こる。

ずっと服のなかで我慢汁を垂らしていたせい<sup>がまんじゅ</sup>か、竿からは蒸れた雄の匂<sup>む</sup>いが漂っている。

それを彼女の視界にちらつかせてやると、身をよじって逃げるので、

「やっぱり団員の奴らに団長が陥没乳首だってバラしてきま——」

「ま、待て。分かった！ 分かったから……！」

彼女はしぶしぶながら襟をゆるめて、豊満な胸を再びあらわにした。

「じゃあ、はさんで」

ぞんざいな動きで乳房に肉棒をくつつける。

亀頭の笠には使い込まれた証のような皺が刻まれ、浅黒い竿にはいくつも筋が浮いていた。裏筋を濡らすように白い我慢汁が垂れて、睾丸にまで落ちていた。彼女は何度も視線をさまよわせた。竿の根元にあるちぢれた黒い陰毛を見ると、生まれたての仔犬のよううに肩を震わせた。

たふんと彼女の胸が揺れる。

つい、からかいたくなつた。

「ほら。早くしないと、その綺麗なお顔にぶっかけますよ？」

「きさまっ！！」

傲然ごうぜんと睨まれたので両手を上げて降参したが、所詮はポーズだ。

優位なのは自分であることに変わりない。

彼女はびくついた様子で自分の胸を持ち上げて、その谷間に竿をはさんだ。  
むにゆる。

我慢汁と彼女の胸をなめ回した時の唾液が絡まって、ちょうどいい具合に彼女の乳房に竿がはりつく。

「う……おおー……きもちいー」

柔らかくきめ細かい肌に肉棒が全て包みこまれた。膣内に入れた時とはまた異なる感触に、今すぐ射精しそうになるのを、必死に押さえ込んだ。

「っ……。ぬめって、気持ちがわるい」

なんてことを抜かしやがる。

「ほら、おっぱい動かしてくださいよ」

乳房のなかで竿を左右に揺らすと、敏感な身体に刺激されて煩悶はんもんの表情を浮かべた。屈辱と羞恥に苛まれながらも、ゆっくりと胸を動かしはじめる。力いっぱい胸の谷間を

締め付けては、持ち上げた乳を下ろす。

胸のなかでどくどくと脈うつ竿の感触に戸惑っているのだろう。懊惱おうれうと好奇心がまざった様子で、胸を押しつぶして柔らかい弾力を与えてくれる。その気持ちよさに吐息をつくと、彼女が悪態をついた。

「ふん。さっさとイってしまえ。このクソ虫が」

どうやらまだ自分の立場を分かっていないらしい。

「俺もイキたいんですけど、こんなヌルいやり方じゃ、イけるものもイけませんよ。もっと激しくしてもらわなきゃ」

胸を持ち上げていた彼女の手の甲を包み込むと、俄然がぜん、乳房を強く引き寄せた。

「ひっ……いやあ！」

「いやじゃなくて気持ちいい、でしょ？ 俺の竿がヌルついているの、分かりますよね？」  
腰を使って、竿を上下に動かすと、敏感な乳房に当たるのを嫌がって彼女が身をくねらせる。

彼女の指の谷間に自分の太い指をからめながら、もみしだいた。

徐々に大きく揺れる谷間から亀頭が顔を出し始めた。

「ひっ！」

顔をそらす仕草さえ、俺を興奮させるとも知らずに——。

びゅっびゅっど我慢汁が飛び散って、彼女の口許をかすめた。

鎖骨や首を白くよごしていく。

我慢汁と蒸れた雄の匂いが鼻をつくのだろう。嫌悪もあらわに顔をそむけた。

「あーあ、傷つくなあ。そういう顔されると、俺、口をすべらせちゃうかも」

「——うう、……だまれ……、この……変態っ」

「そういう口のわるい団長にはお仕置きしなきゃいけませんねえ」

言うなり彼女の手から離れて、両方の乳首をつまんだ。ぴん、と立った長細い乳首をゆつくりと我慢汁と唾液で濡れた竿に近づける。

「おい……待てっ。やめろ……きさま……やめんかつ！」

彼女の顔が、数秒後に乳首から伝わる快樂に怯えるのが手に取るように分かった。蛾眉<sup>がび</sup>をゆがめた表情をねちっこく見つめながら、つまんだ乳首を竿にすべらせた。

それはもう勢いよく。

「ヒンツ！ い、やあつ、……ダメ……それ、だめ……なの……おおツ！」

「今のでまたイきましたね？」

「ちがつ……！」

赤面する彼女を言葉でじつくりと追い詰める。

冷静に観察しながら、薄桃色の乳首を我慢汁で濡らした。

敏感な乳首をつままれて乳房が大きく揺れる。彼女の胸をむんずと掴んだ。

「ふんっ」

激しく竿を上下させると、玉から精液がのぼってくる。竿が硬さを増し、さらにたくましくなった。

それをダイレクトに感じ取った彼女の秀麗な顔に怯えが走る。

「ぐうっ……イクぞっ。ライザ！」

名前を呼ぶと、つまんでいた乳首がびくと反応する。その反応にほくそ笑みながら、射精した。

ぶびゆる！！

尿道から白く濁った精液が噴き出す。勢いよく飛び出した白い粘性ねんせいの液体は彼女の頬や鼻、口許を汚し、美しい黒髪にもかかった。

昨晚、娼婦相手に出したにもかかわらず、たまっていた性欲は耐えることなく体内で燃え続け、そのまま彼女の胸の谷間にもぶちまけた。

ぬち、ぬちゅ。

精液がまだ溢れてくる龟头を胸の谷間に塗りつけてやった。

大きな乳房の間に白いつり橋がいくつもできあがった。

何秒たったか。

ようやくと吐き出し終えた頃には、彼女の顔はひどい有り様だった。

「っ。……このっ……」

ねっとりとした液体が前髪から垂れ落ちて、高い鼻梁びりょうにポタポタと落ちる。

鎖骨のくぼみには精液がたまり、白い池を作っていた。

上着を脱いだ上半身は、あまさず精液で穢されている。

幾重にもねばついた白い糸が絡みつき、彼女の美貌に淫靡いんぴな華を添えている。

初めて見た男の射精に彼女は呆氣にとられていた。

放心状態の彼女にたたみかけるように、言い放つ。

「じゃあ次はお口できれいにしてもらいましょうか？」

「……………え……………？」

ヌツと彼女の鼻先に精液まみれの肉棒をつきだした。

尿道からは抜き終わりの精液がまだ溢れていて、裏筋を垂れている。

「団長のおっぱいでこんな風になったんですから、最後まで面倒見て下さいよ」

\*\*\*

目の前に突き出されたモノはいまだオスの香りを漂わせていた。浅黒い肌の竿には太い筋が隆起し、亀頭にはいやらしいシワが寄っていた。

先程まで自分の胸に隠れていた部下の肉棒がいまやライザの視界にあらわになってい

た。

いまでも乳房は熱い。

彼の肉棒を包んだ時の熱さが残ったままだ。

(こんなモノどうすれば……)

口で綺麗にしろと言われてもやり方が分からない。

年とし甲がい斐もなく、剣の道に明け暮れていたせいで、こうした男女の仲の知識は驚くほど少

ない。

そもそも今の胸ではさみこむやり方も一般的なやり取りなのか、分からない。

だが副官の屹立きつりつとした性器を見せつけられて、身体の熱がどんどん高まっている。

へその下がじんわりと温まり、ライザの秘部はさつきから濡れっばなした。

(分からなくてもやらなければ……)

陥没乳首だとバシたら今までこの騎士団で費やした時間は水泡に帰す。

騎士団長としての威厳もなくなり、クソ虫となじっていた彼らにどんな目を向けられるか分かったものではない。

ここは我慢する時だ。

ぐっと歯を食いしばり、なんとも言えぬ匂いを放つ竿におそろおそろ手を添えた。

亀頭から垂れてくる精液の残滓ざんしを指ですくい上げては口に運ぶ。

苦い味に顔をゆがめながらも、なんとか唾と一緒に飲みくたす。

「そんなんじゃ、いつまでたっても終わりませんよ。ほら、口も使ってください」

おそろおそろ舌を亀頭にのぼし、くちゆくちゆと泡立つ我慢汁を舐めとった。

ゴクリと飲み込むと苦みが口全体に広がり、なまぐさい匂いが鼻をついた。

「舌全体を使って、ああー、笠のところ、ほじって下さい」

抵抗する術はなかった。

言われるがまま、舌で亀頭の笠をほじると、舌先に恥垢ちこうが乗り、雄の匂いがさらに強くなった。

「んん、……あ、む……う、う」

「両手でしごいて下さい。そうそう」

男の言葉に促されるまま、筋が浮かんだ竿を両手のひらでしごく。

さっさと終われ、と念じながら睾丸を揉むと、ピュッピュッと再び雄の汁が飛び散り、ライザの美しい頬や鼻を汚した。

「あー。玉もむのうまいですね。さすが団長。でもちよっとこれだと時間かかっちゃうなあ」

（なぜ？ どうして？ ……さっきまであんなに反応してたのに）

「すみませんねえ。俺、遅漏なもんで。その程度のテクじゃイケナイんで、俺のやり方でやらせてもらいますね」

「なにを言っ——ウンン、っ……むぐっ……!!」

突然、頭をつかまれ、強引に口の中へ竿をねじこまれた。苦い液体が口いっぱいに広がり、大きな竿が頬の裏側の粘膜を確かめるようにゆっくりと口蓋を蹂躪する。

息苦しさに目に涙をためながら睨みつけてやったが、全く効果はなかった。

「あー。そのキツイ目で睨まれるの最高。ほら。団長も暑くて喉かわいでるでしょ？ 俺の我慢汁たくさん飲んでくださいね」

後頭部を掴んでいた手が顎に移動して、強引に口をわらされた。くさくて太い竿から、

びゆるびゆると我慢汁を口に流し込まれる。

「や……ア、あ、あ。……くっくッ!!」

そのまま吐き出すことも許されず、ゴクリと飲み込まされた。苦く、えぐみの強い味に涙がこぼれる。

自分の唇を穢された思いがして、殺意のこもった眼差しを送ったが、余計に副官の剛直を滾たぎらせるだけとなった。

「そんな睨にらまれたらもつと元気になっちゃいますよつと」

「うん……!! ムむ、ぐう——ッ!!」

口いっぱいに竿をほおばる結果となり、亀頭が口のなかで先走りを漏らす。舌で必死に押し出そうとするが、頭をつかまれてうまくできない。

「団長の喉まんこ、どこかなあ」

「ふう——ッ、くっくッ!!」

くぐもった声で反論しようと試みるが、熱い肉棒で口内をまさぐられるだけだった。じゅくじゅくと先走りを垂れ流す亀頭が、口の形を確かめるようにぐりぐりと這いずり

回る。

「みーつけ」

その言葉と同時に喉に竿を押し込まれた。

唇にちぢれた陰毛がくつつき、竿を根元まで飲み込ませられる。

えづくこともできない。

鼻で呼吸しようとすれば、部下のすえた雄の匂いを深く吸い込むはめとなり、しげんと腰が揺れる。屈辱で涙がこぼれた。

「う、お。超ヌルヌルでやらけー。団長のお口、最高。さすが、いつも叱り飛ばしてるだけあって、しごくのにもってこいですね」

まるで甘露かんろとでも言いたげに、部下の悦に入った声が頭上から降りかかる。

涙目になりながらもきつく睨み上げると、剛直が硬さを増した。

「ほらほら。休んでる暇ないですよ」

言うなり、喉にねじこまれた剛直を勢いよく抜かれて、さらに押し込まれた。粘膜に龟头をこすりつけられ、筋張った竿が舌にはりつく。容赦なくしごかれ、息苦しさに何度

もえづいた。それでも負けじと威圧の眼差しを叩きつければ、下唇に当たる陰囊いんのうがころなしかふくらんだ。

(い、や……だ……、まさか……)

副官が余裕のない笑みを浮かべると、喉奥に灼熱の肉棒を差し込まれた。

「ううッ！ 出す、ぞ……っ！」

「んん！！ くっッ、ッ、っ！！」

切羽詰せっぱつまった声と同時に、口内に二度目の精液をぶちまけられた。

びゅッッくん！！

さつきと同じ量のねばついた液体が喉にはりつき、ライザの口内を満たす。喉をすべり落ちていった液体はそのままライザの体内にねつとりと残り、とろ火のように身体を熱くさせた。

まるで身体の内側に火を灯されたようで、心が落ち着かない。

「はあ……ッ。……あ……ッ……ん」

ようやく口から出ていった肉棒は力をなくしていた。

だが、肉棒はライザの口を汚すだけにとどまらなかった。艶やかな黒髪で残りを拭き取るという暴挙に出た。

「貴様、自分が何をしているか……」

「なに言ってるんですか。団長も感じてたでしょ？」

椅子の上で固く閉じていた両足のあいだに、強引に副官の膝が割りこんできた。

「やだ……やめ……、」

必死に男の膝を手で押し返そうとしたが遅かった。

グリグリッ。

すっかり感じていた秘部を膝で押され、悶絶する他なかった。

「んん——ッ、つ、つ、いやああアアア!!」

「ほうら。やっぱり団長も感じてるんじゃないですか。可愛い」

言われ慣れない言葉にさらされて、またもや反応が遅れる。

たくし上げられたスカートを元の位置に戻そうとしたが、それより早く副官にめくり上げられた。

濡れそぼった下着があらわになる。

「おっ。大洪水じゃないですか。うれいいなあ。そんなに俺の指でおっぱい揉まれたの、良かったですか？」

ピン、と上向いていた乳首をクリクリと回される。何度も軽くいった身体は敏感になっていて、その動きだけで腰が震えてしまう。

「おうおう。自分から腰ふっちゃって可愛い〜」

「ちが……っ、これは、お前が勝手に、……ひんっ！」

彼の魔手がゆっくりとだが着実に下半身に伸びてくる。

足を閉じようとしたが、彼の足にはばまれてしまう。

かえって彼の足をより深く挟み込む結果となり、グイグイと自分から彼の膝を迎え入れる体勢になってしまう。

「うわ。俺のズボン、団長のお汁で濡れてきちゃいましたよ」

「やめ……ろ、……そ、ンなこと、言うなあ……ッ」

「ほら、団長も見てくださいよ。俺の膝」

視線を下げると彼の言う通り、確かにズボンの膝に濃い染みができていた。

「団長の弱いところ、全部教えてもらいますからね」

胸をつかまれ、指がうもれる程もまれる。陥没していた乳首を指の腹で押し込まれると、愛液が溢れてきて、下腹部が熱くなってしまう。

固い膝で秘部を押されると、尻が切なげに揺れる。

身体が勝手に彼を求めてしまう。

しかしライザのプライドは、こんな年下の、地位も家格も低い男に手玉に取られることは許せなかった。

なによりも人のことを処女だの経験が少ないだの、ばかにされるのが気に入らない。

副官の襟元に指をひっかけて、その顔を引き寄せる。

快楽に流されていても、元々の能力の違いから苦も無く形勢を逆転できる。

まだ、できるのだ……。

一瞬、ちゃらけていた男の目に怯えが走った。

(……イイ顔をするではないか)

うっすらと無精髭の生えた頬を優しくなでれば、さらに男の怯えが強まったので、唇を奪った。

目を見はる表情がおもしろくて、男の肉厚な舌を甘噛みしてやった。  
意趣返しだ。

少しは思い知れ。

そのまま舌を吸い上げて反論を封じる。襟元は引き寄せたまま離さない。そのまま男の猪首にかぶりと噛みついてやった。

うっすらと汗がにじんでいて、しょっぱい味がした。

「ちよ……っ。あんたねえ……!」

「人をさんざんコケにしてきた報いだ。少しは理解したか？」

鼻で笑ってやると、彼の目に剣呑な光が宿る。

「理解……、理解ねえ。イイですよ。団長がその気なら俺もやってやろうじゃないですか」

ふてぶてしい笑みを浮かべると、強引に椅子から引き上げられた。

互いの腹が密着し、男の手が腰から徐々に尻へと降りてくる。

一体なにををするというのか。

形勢はこちらが有利だ。ほんの少し手首に力を込めれば、簡単に倒すことができる。陥没乳首だの処女だのと知られても、反撃の仕方はいくらでもある。

そう思った瞬間だった。

「ま、俺としてはココが弱いんじゃないかと思うんですよ。団長は」

尻の割れ目にのびた手が、小さなすぼまりに触れる。

「なっ……!!？」

——尻穴。

今まで誰にもさわられたことのない場所をさわられて、気が動転した。

確かに胸や秘部を触られはしてきたが、あくまで性交渉の一つとしてさわる部位だと理解してきた。

だが尻穴は違う。

そこは性器などでは決していない。ましてや快楽の生じる場所ではありえない。

「——気の強い女は尻が弱いつて聞いたことがあるんですよ。娼館の女の子たちにも気の強い子ってのはいるんですけど、どうしたってあっちは商売ですからね。どこかで芝居が入るんですが……団長はどうですか?」

「や、やめ——っ!」

密着した身体を引き離そうとしたが、一歩遅かった。

つぶり。

狭い肉穴に男の太い指が無理矢理押し入ってくる。

きつい粘膜をゆっくりと押し広げるように、第一関節まで入れた指をくるくると回して、  
肉壺にくつぼをかきまぜた。

腰を抱き寄せられ、再び密着する形になると男の指は水を得た魚のように、粘膜をつついてくる。

「可愛い声で啼いて下さいよ。団長」

ささやきとともに、耳たぶをなめられる。太い舌が耳たぶを這いまわり、厭らしい水音を伝えてきた。



じゅぶつ、ぶぶん。

空気を孕んだ音は、部下の前で屁をひらされているようで、とても恥ずかしい。耳から伝わる恥辱にライザはあえいだ。

このままでは立っていられなくなる。

男の指一本で、団長としてのプライドがぐずぐずに溶かされてしまう。

「っ——もお、立て……ない」

懇願の声を上げるが、男の指はとまらなかつた。

腰を抱いていた手も尻にまわされ、恥ずかしい穴を両手の指で強引に広げられる。

男の指がもう一本入ってきて、さらに執務室に響く音が大きくなった。

仕事に使うべき部屋で、部下と淫靡な情事を繰り広げている。

その事実にもたライザの羞恥心が責め上げられた。余計に彼の指の形を感じるはめになる。

「うーん、立ってるのがつらいならソファに行きましょうね」

まるで赤子をあやすような優しい口調で、応接用の長椅子ソファに四つん這いにさせられた。

尻を高くもちあげられる。

「待って。この体勢は、だめ……だ」

今まで誰にも見せたことのない場所を部下に見られている事実には、恥辱ちじよくがいや増した。尻を隠そうと手を伸ばす。

「ワガママだなー。うちの団長は」

「ぱちん、と尻を叩かれた。」

「あ……」

痛いはずなのに、むず痒い気持ちが増える。単純な気持ちよさとは異なる感覚にライザはとまどった。

これ以上やられたら、まずい。

本能的に感じ取って、男の手を止めようとしますが今度は彼の言葉にはばまされた。

「団長のケツの穴、とろとろですよ。キュンキュン動いててカワイイー」

「やめ……っ。やめろ……お。そんなコト言う……なあ……！」

「腰が立てなくなるぐらい、溶かしてやるからな。ライザ」

対等な物言いを突然はさみこまれるせいで余計に身体が感じてしまう。

しかも名前を呼び捨てにされた。

今まで家族にしか呼ばれたことのない名前をこんな近くで男に呼ばれるのは初めての経験だった。

「ほうら。指を増やしますよ」

ねちっこい口調にあわせて、一本、二本、三本と押し込まれる。

ずぶずぶと送り込まれた指は狭い穴を拡張するようにばらばらに動いて、肉ひだを刺激してくる。

浅い肉壺を突いたかと思えば、内側の突起を指の腹で何度もぐりぐりと押された。

体内で埋み火うづとなっていた快樂が燎原りょうげんに広がる炎となって、ライザの全身を蕩とろかしていく。

一番ほしい場所は手つかずのまま。

必死に四つん這いになって耐えていた手が辛抱できず、自分の秘部に向かってしまう。

（だめだ。こんなこと……、ダメなのに！）

自分の指で小さな豆をつまんでしまう。

部下の手で、ライザの秘部はもうすっかり濡れていた。ひっそりと生える陰部の縮れ毛は愛液と汗で湿り気を帯びていた。

「んんっ……ひっ、ああ……っ」

クリトリスをつまんでみるが、全然足りない。

太さも、激しさも。

その物足りなさが余計にライザの身体を燃え上がらせた。

「へえ。団長は部下にお尻いじられながら自分でするのが趣味なんですか？」

部下のあざけりにも反論できる力はなかった。

刺激がほしい。

もっと強い刺激が。

この身体中を這いずり回るとろ火を一気に燃やしてくれる激しいモノがほしくてたまらない。

「うう……ほしい、ほしい、の……」

かぼそい声で自分の肉豆を激しくいじる。愛液に濡れた指は陰唇の上ですべり、うまく動いてくれない。

「じゃあ、まずはこっちでイってみましょうか」

「え……？」

部下の言葉の意味が分からず振り向いた瞬間、肛門を虐めていた指が三本とも揃えられ、勢いよく尻穴をかきまぜられた。

ぐぶぶつ。

下品な音とともに、肛門の内側をなぶられる。

「——や——あああああああツツ、つ、つ!!」

甲高い嬌声とともに、快樂の波濤はとうがやってきた。

四つん這いでたっていることもできず、尻を突き出したままソファに倒れこむ。

ふしやああああ。

まるでおしっこを漏らしたような水音が聞こえた。自分の秘部から愛液が噴き出す音だった。間断かんだんなく降り注ぎ、ライザに屈辱を与えてきたが、もうどうにもできなかつた。

念願の快楽を与えられて、ライザの身体は悦んでいた。

初めての責め苦に太ももは痙攣けいれんしっぱなしで、起き上がることもできない。

「おーおー。アクメ決めちゃって凄いですねえ。でも本番はこれからですよ」  
腰を持ち上げられて、身体をひっくり返される。ソファに大股開きで座らせられた。足を閉じようにも男の指にイカされた身体は、もはや自分の意思で動かせない。

「もお、むり……」

息も絶え絶えに訴えたが、この男は自分の言うことなど聞きもしなかった。

「なに言ってるんですか。俺に触ってほしかったんでしょ？」

イカされて敏感になった秘部からあふれる愛液を太い指ですくいとられて、肉ひだがひくついた。

みつともない。騎士団長たる者がなんてザマだ。

しかし部下は輪をかけて容赦なかった。

愛液をすくいとった指を目の前に持ってこられて、ねばついた液体を見せつけられた。透明な液体が指の腹からゆっくりと垂れ落ちていく。

「すごい量ですよ。全部あんたが出したんですよ」

糸をひく透明な愛液を彼は、難なく自分の舌で舐めとった。うまそうにしゃぶる様子を見せつけられて、まるで直接恥部を彼にねぶられた感触がした。

去ったはずの快楽が再び灯って、ライザの肢体に襲いかかる。

ライザは生唾を飲み込んで、強引に燃えさかる情欲を押しさえつけた。

「…………。今のは…………おまえが、…………さわる…………から…………」

「さわるから、なんです？」

追い打ちをかけられて、なんとか言葉を発しようとしたが、秘部に彼が指を近づけてきて失敗した。愛液でぐっしょりと濡れた指の背によって、黒い恥毛がそそり立つ。

透明な蜜をかけられた茂みはあつという間に男の指先で湿っていく。

「…………うんっ！ や…………ああ」

「男を知らない団長に、ちゃんとイチから教えてあげますから。俺が」  
横暴な物言いに足を閉じようとしたが、失敗した。